

帝王の御けしきよき公卿大臣の外は拜領して乗る事もなし、されば良家と書てむまへとよむ事も此ゆへなり、日本紀万葉の所見分明なり、

〔日本書紀應神〕十五年八月丁卯、百濟王遣阿直岐、貢良馬二匹、即養於輕坂上厩、因以阿直岐令掌飼、故號其養馬之處曰厩坂也、

〔續日本紀元正〕靈龜二年六月辛亥、正七位上馬史伊麻呂等、獻新羅國紫驃馬二疋、高五尺、

〔續日本紀元正〕養老三年閏七月癸亥、新羅使人等、獻調物并驛馬、牡牝各一疋、

〔扶桑略記朱雀〕承平四年七月十七日、薩摩國唐馬一疋、羣毛牽進左大臣家、

〔太閤記十六〕遊擊將軍日本再渡の事

大明正使參將謝用梓龍岩副使遊擊將軍宇愚兩人、小西攝津守同船にて、八月三年晦日、大坂に至て著岸せしかば、正使は羽柴備前中納言秀家所にて馳走申べし、副使は蜂須賀阿波守所にして、もてなし候へとなり、九月朔日御禮申上、大明の皇帝より、御裝束紅葉衣赤色袖紫緋の大口翰書を獻す、

生物中馬

〔板坂下齋記中〕慶長四年の冬、略龍伯津鳥も御禮被參、進物ムリヤウ十卷、朝鮮馬一疋、チブ家康公

路次の外へ迎に出、御同道數寄屋へ御連立、略中馬は島津駿とて御秘藏にて、關ヶ原へも召駿府

迄も十年餘被爲召候、

〔内安錄〕一享保より天明の間は、バルシヤ馬度々御取よせに相成、數多御用に相成に付、阿蘭陀甲比丹へ別段銅被下候、此馬は齋藤三右衛門御預、乘込棒飛の上覽もあり、房州峯岡牧へ父馬に御放し、今もバルシヤ筋といふ野子あり、方今騎戰調練も有之、或は神奈川本牧へ早乗等には、專要のものなり、阿蘭陀へ軍艦蒸氣船の御詔はあれども、バルシヤ馬の御詔をきかず、徳廟騎戰の思